

OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.22

2020年7月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

創立70周年記念で集会

六甲山全山縦走も

副会長 山田 靖則

阪大山岳会が1949年（昭和24

年）6月に設立されて、昨2019

年は創立70周年の節目に当たった。

これを記念して9月28～29日の2日

間にわたって六甲山の神戸市立自然

の家・摩耶施設で記念集会が開かれ

た。理事会で事前に行事案を検討し

た結果、会員の現役時代のトレーニ

ング場であった六甲山を2日間で全

山縦走し、宿泊場所で行等の発表

会及び懇親会を行う、全山縦走に参

加できなくても、各自任意の場所か

らの集合も可とする、学生会員（山

岳部員）も体力トレーニングの一環

として参加できることを趣旨として

開くことにした。実施日の設定は、

白馬集会和近接しないこと、学生が

夏休み期間で参加できることを念頭

に設定したが、残念ながら現役部員

の参加はわずか2名だった。参加者

は左記の通り。（敬称略）

【全山縦走グループ】大野義照会

長、石原敏雄、科野昌蔵、草尾寛（現

役）山崎優太（基礎工修士2）、首



会場玄関前で

藤敦志（医1）

【集会参加のみ】野田憲一郎、大

川和秋、高田邦雄、出雲路敬孝、山

田靖則、中岡和哉、黒岩芳夫、井上

太一、森藤正人〓全15名

集会参加のみでも宿泊場所へのア

プローチや下山ルートを工夫したメ

ンバーもありました。

集会では、以下のような活動記録

がパワーポイントやスライドなどで
発表されました。

◆1959年 黒部川上廊下積雪

期横断（野田）

◆1963年 P 29第2次隊遠征

準備（山田）

◆1976年 カラコルム・アプ

サラサス（石原）

◆2012年 マッターホルン、

モンブラン（井上）

◆2018年 旧梅の木寮、神ノ

田圃（大野）

発表会の後は、現在の山岳部の状

況と今後の登山活動活性化に向け、

山岳会の支援体制や山岳部へのこ

入れについて熱のこもった討議がな

されました。この討議はその後、具

体的な山岳会の活動や山岳部の活動

強化への議論として、役員会のメー

リングリストを使用して継続的に行

われています。また、もう一つの節

目である75周年記念事業として検討

されている海外登山について、具体

化に向けた体制整備の方向が協議さ

れました。

現役の参加が少なかった集会でし

たが、参加した部員は、会員たちの

山岳部への熱意を強烈に受け止めた

様子で、山岳部の今後の活動に反映

されることが期待されます。

また、75周年記念事業の海外登山

については「海外登山研究会」（委

員長・石原敏雄副会長)を設置して検討することにしており、その内容は別稿で触れています。

六甲全山縦走の記録は、現役(山崎優太君)がまとめたものを掲載します。

【行程】

9月28日 宝塚駅―六甲最高峰―自然の家(泊)

9月29日 自然の家―摩耶山―鍋蓋山―菊水山―須磨アルプス―JR塩屋駅

【メンバー】

28日 山崎、首藤(以上現役)、大野、石原、科野

29日 山崎、首藤▽市ヶ原までⅡ大野、井上、草尾▽菊水山までⅡ石原、科野

【記録】

28日 8時、宝塚駅に集合して出発。六甲最高点は休日のせい、人であふれていた。15時前、会場の神戸市立自然の家・摩耶施設に到着。夜はOBの方々の登山・遠征報告を聞き、これからの山岳会や現役の部活動の現状について話し合った。私は最近、部活にはほとんど関わっていなかった。的確な発言ができなかった。今後はOBと現役のパイプ役としてもう少ししっかりしたいと思う。



会場の神戸市立自然の家・摩耶施設

29日

7時半出発。摩耶山からの下りで、高校生が歩荷で続々と登ってくるのに出会う。聞くと、部員は50名もいるそう。阪大に入ったらぜひウチへ。鍋蓋山からの下山途中には、熱中症と思われる症状で救助を呼んだ人に出会った。その後、ヘリが来て、救助隊も登ってきた。

菊水山の下りでカワセミを見つけた。首藤がカワセミをセミの仲間だと思っていたことに衝撃を受ける。菊水山から高取山、高取山から横尾山の間の街歩きでは少し道を間違えた。横尾山の登りでは首藤がかなりつらそうであった。旗振山からの下りでは予定とは違う道を降りてしまい、かなり長く住宅地を歩く羽目に

なった。18時15分、JR塩屋駅到着。

無事、六甲全山縦走を完遂した。

海外登山研究会が発足

75周年記念事業に挑戦

副会長 石原 敏雄

創立70周年を迎えた大阪大学山岳会の設立記念集会在昨年9月末、六甲山の神戸市立自然の家で開催され、75周年記念事業として海外登山の企画提案が要請された。そして2

カ月後の11月理事会で、海外登山隊の派遣を検討するための「海外登山研究会」発足が承認され、私が委員長に選ばれた。

発足以前からパイオニア精神を標榜し、フロンティアを目標に掲げてきた当会の75周年記念事業である。しかし、山域さえ定かでないし、要員不足も明白である。会員全員の知恵をお借りし、山岳会の総力を出し切って、フロンティアの香りが残る記念事業の企画に挑戦してみることにした。

幸い、高年ながら現役クライマーとしてアルパインスタイルの登山に活躍中の会員もいる。彼らの協力も得て、これから4年間の準備期間を有効に活用できれば、難産が予想されるものの、面白い企画を生み出せ

る可能性はある。そこで、まず、準備期間中に毎年、海外で1回、国内で数回の登山合宿を開催することにした。

合宿では、中高年の会員にはそれなりの登山活動への復帰を促すようなコース、最新の登山技術の伝承を望む会員にはアルパインコースなどの幅広いメニューを設定する。学生会員の参加を歓迎し、学生会員や若手会員と年配会員との壁の解消や会員相互の交流の活性化も目指す。この合宿を通じて75周年記念事業に参画する会員の育成や参画意識の醸成を図る。一方、これらの合宿や海外登山研究会で、地球上に残された数少ないフロンティアの探索を始める。さらに記念事業に参画できる人材の確保に向けた方策を提言する。このような方針で活動を開始しようとした矢先、新型コロナウイルス騒ぎの影響で、前回の理事会以降、すでに半年余りが無為に過ぎてしまった。ちなみに、今年の1回目の国

内合宿としては5月連休に穂高連峰の岳沢定着合宿、海外合宿は中国四川省の四姑娘山山域北方の華棚溝でのトレッキングと千石規模の岩壁連続登攀をそれぞれ計画したが、中止の止むなきに至っている。

単なる絵空事で終わる可能性もある今回の取り組みを進めるに当たって会員各位の一層強力なご支援をお

願いたい。特に、会員各位からのパイオニアやフロンティアに関するアイデアをお聞かせいただきたい。最後に、75周年記念事業に向けた活動を通じて、スポーツクライミング志向の強い現在の現役山岳部にアルパインスタイルの登山活動を復活させ、両者のスタイルが共存、維持されていくことを期待する。

真夏の大雪溪越えて

現役の白馬岳山行

山岳部前主将 山本 悠磨

昨年8月9日から2日間実施した現役部員による白馬岳山行について報告します。今年は現役部員4名での山行でした。

【参加者】 山本悠磨（し、工3）、島崎拓人（基礎工4）、矢野直人（外3）、大田溪介（工2）

【9日】8日朝、大阪駅を出発し、鈍行列車を乗り継いで19時ごろ白馬駅到着。キャンプ場に泊まりました。真夏でも半袖では少し肌寒いと感じる涼しさでした。朝6時、白馬八方バスターミナルで登山口の猿倉までのバスに乗り、20分ほどで猿倉に着。白馬尻までは標高差300mほどで、木々が生い茂っていて急勾配

などではなく、歩きやすい道でした。白馬尻から少し登った先が今回の目的ともいえる大雪溪で、逆に言えば最大の難所ともいえます。落石が多く発生していて、慣れないアイゼンでの登りでした。自分たちが登った後、大きな落石があり、トレースの上を通っていたので少し肝を冷やしました。大雪溪を抜けた後、つづら折りのハイマツ林の中を登って頂上宿舎へ。そこから稜線に沿って少し登り、テント場に到着しました。大雪溪ではガスで見晴らしが悪かったですが、総じて天候もよく、非常に楽しめました。

【コースタイム】猿倉（6:22）

—白馬尻（7:20）—葱平（10:00）—村宮頂上宿舎（12:10）—テント場（13:05）

【10日】6時前にテントを畳んで出発し、20分ほどで山頂に着きました。夏らしい雲と稜線がとても美しい景色でした。ここからは白馬大池に向かって、三国境や小蓮華山などのピークで小休止を挟みながら稜線沿いに下っていきました。白馬大池は水も澄んでいて美しかったです。ここから乗鞍岳までは直径2mほどの岩が転がっている最後の登りで、狭く混雑していました。このピークを下りきってからは、つづら折りで足に来るものの、道も整備されていて歩きやすかったです。帰りはロープウェイ、バス、鈍行、夜行バスと乗り継いで翌朝、大阪に帰りました。今回は予定がタイトだったこともあって短い合宿になりましたが、今後、より長期間の合宿も実施していけたらと思います。

【コースタイム】テント

場（5:50）—白馬岳（6:10）—三国境（6:50）—小蓮華山（7:35）—白馬大池山荘（9:20）—天狗原（12:10）—梅池山荘・自然園駅（13:30）

これ以外の昨年度の主な活動として中之島山岳部と合同で定例山行を行いました。また、今年は残雪期に冬山登山の練習をする予定でしたが、新型コロナウィルスの影響もあって実施できませんでした。今後、冬山登山に興味のある部員を集めて練習をしていきたいと思っています。

ボルダリング活動では、部内でコンペを開催したり、一般の大会に出場したりしました。また、昨年度は外岩の活動として、東は山梨県の瑞牆山まで、西は高知県の奥物部のエリアまで様々なボルダリエリアに遠征に行きました。GWなど大型連休の3日間程度の合宿に加え、シーズンにはほぼ毎週、日帰りの企画が実施されました。

今年度は主将を大田溪介（工学部応用自然学科）に引き継ぎました。



白馬岳頂上で

今年度も登山とボルダリングのどちらにも力を入れて活動し、大阪大学

山岳部長が交代

新部長に奥山宏臣氏

大野義昭現会長が2008年3月に山岳部長を退任されてから12年もの長きにわたって山岳部長を務められた森藤正人氏（工学研究科助教）が持病による体調悪化を理由に辞任を表明され、4月1日、後任に奥山

宏臣常務理事（医学研究科教授）が就任することになりました。森藤前

部長は「厳しさとより安全を」をテーマに現役部員の指導に当たってこられました。クライミングウォールの設置による部員数の急増にもかかわらず、登山活動の不活発という状況に苦慮していました。近年、ようやく夏山登山が定着してからは不自由な体をおして現役の山行に随行されていました。

奥山新部長は、森藤前部長と共に山岳部活性化の活動に参加し、夏山山行への同行など現役の指導をされており、今後、山岳部の活性化に向けた取り組みが本格的になることが期待されます。

なお、山岳部長は阪大体育会所属

山岳部のますますの発展を目指していきいたいと考えています。

団体である山岳部の責任者として、体育会長・阪大総長が教職員の中から委嘱する役職で、山岳会の役職ではありません。（事務局）

山岳部長に選ばれて

奥山 宏臣

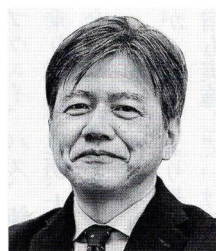
新型コロナウイルスが世界中で猛威をふるい、人々の生活を一変させてしまいました。どれほど発達した

科学技術や医療も、急速に広まる新興感染症の前には無力であるという厳しい現実が突きつけられています。そんな中、大学構内の桜が今年も綺麗に咲きました。誰もが心待ちにしていた春の美しい景色です。

我々の不安や恐れとは関わりなく、こうして、いつも通りに繰り返される自然の営みを見ると、ヒトは自然のごく一部にすぎないことを改めて思い知らされます。今、我々がなすべきことは、国境や利害など、あらゆる壁を乗り越えて英知を集め、賢

明な選択をして、安心して暮らすことのできる場所を取り戻すことです。自然の一員として生きるヒトのintelligenceが試されているのだと思います。

さて、私、今年度より森藤正人君に代わって山岳部長に選ばれました。現在は医学系研究科の小児成育外科に所属しております。よろしく



お願いします。森藤君の在任中は、廃部の危機もあり（一時期、部員

数が全学年合わせて1名になりました）、ご苦労が多かったのではないかと思います。

森藤君には中之島山岳部との連携（体育会山岳部との兼部をお願いしました）やクライミング壁の設置（OBの皆さんにも多大なご寄付をいただきました）など、部の存続のために大変ご尽力いただきました。長い間、お疲れ様でした。これからは少し気楽に山岳部に関わっていただければと思います。

山岳部の現状を紹介します。昨年時点での部員数は18名（部員リスト上）で、日常の活動はクライミングが中心となっています。体育館に設置された人工壁は連日、にぎわって

いて、合宿も外岩でのボルダリングが中心です。一方、テントを担いで山に登るといふ我々OBがイメージする山岳部の活動は夏山の2、3日間という状況です。どうしても個人的な活動に偏りがちですので、部全体として共通の目標を設定することは難しそうです。

山に限った話ではないのですが、同じ目標に向かって色々な人間と色々な経験を共有することは、学生時代の何よりの特権です。部員の皆さんには、そうしたかけがえのない時間を一緒に過ごす仲間を見つけてほしいと思います。

部長就任に当たった抱負というか目標は、山岳部がそうした機会を提供できるよう、1人でも多くの学生に入学してもらい、1年を通してみんなで山に入る機会を増やすことです。

2024年に大阪大学山岳会は創立75周年を迎えます。これまで諸先輩が山に注いできた情熱に思いを馳せ、これからの山岳部の発展につながるような楽しい活動を企画したいと思っています。現役部員とOBの皆さんの協力が必要です。ご支援のほど何卒よろしくお願い致します。

（1984年医学部卒）

退任にあたって

森藤 正人

2008年に大野会長から山岳部長を引き継いで以来、微力ながら職に当たってきましたが、かねてからの健康問題によって退任することとなりました。

就任当時は部員減少が著しく、長年続いてきた日本アルプスでの合宿も出来ない有様で、新入生勧誘のため、2人しかいない当時の部員と一緒にサークルオリエンテーションでチラシを配ったことを思い出します。残念ながら新入部員獲得はならず、私自身も同じころ、持病の若年性パーキンソン病の診断を受けたこともあり、山岳部も私も苦しい時期でした。

その後、数多くの方々のご尽力によってクライミンググウォールを設置したことをきっかけに山岳部は勢いを盛り返しました。しかし、その一方で、山岳部のありようが、かつてのように年に数回、合宿を行い、強い絆で結ばれた部員たちの集団ではなく、室内クライミングを主としたサークル活動のような形態へと変化していききました。それでもこの数年は夏山合宿を行うまでになり、私も涸沢や剣沢と一緒に行って（フラフ

ラでしたが）山の良さを改めて感じることができました。

阪大山岳部は、奥山新部長のもとで新たな方向へと進みます。75周年を迎える山岳会とともに、長らく途絶えていた海外の山を目指します。このプロジェクトで意欲ある若い人たちが未踏の頂きに立てたら素晴らしいことだと思います。阪大山岳部の伝統である、「事故は絶対起こさない」を忘れることなく進んでいくことを強く願います。

私は、しばらくは静養して過ごしますが、回復したら登山活動も出来るよう鍛錬を続けます。これまでのご支援に感謝するとともに、今後も引き続き阪大山岳部へのご支援をお願いします。

（1985年基礎工学部卒）

先輩同行で冬山入門

八ヶ岳・赤岳山行

山崎 優太

【期間】1/18～19

【メンバー】石原敏雄、畑秀信、

山崎優太

【行動記録】

1/18 美濃戸口―美濃戸山荘―南沢大滝―行者小屋

午前8時、小淵沢駅に集合。東京から来たOB2人の車にピックアップ

プしてもらう。久々の夜行バス移動であり眠れなかった。雪上テント泊は初めてのため、個人マット2種類、シュラフカバー2枚、ダウンジャケット2着とかなり余分に持つ



赤岳山頂で

ていったが、荷物チェックをしてもらい、容量が3分の2まで減った。夏合宿で余計なものを色々と持って行った1回生のころを思い出した。

装備を整えて10時に美濃戸口を出発。15分も歩くと汗ばんでくる。例年に比べて雪は少ないらしい。美濃戸山荘から私だけアイゼンをつけ、アイゼン歩行の練習をする。今回は石原さんからワンタッチアイゼンを借りた。今回のルートは登山者も多く、トレースがしっかりついていた

ので非常に歩きやすかった。

途中、畑さんがよく行くという南沢大滝へ立ち寄った。滝は見事に凍っており、アイスクライミングを楽しむ人が数人いた。ここでアイゼン、ピッケルの基本的な使い方を教わる。急斜面ではつま先のみを使ってキックステップで登るが、岩登りでつま先の使い方に慣れていない私にはかなり難しかった。南沢大滝でかなり時間を費やし、行者小屋へは17時前に到着。ヘッドライトを出すぎりぎりの時間であった。

晩御飯は畑さんが鍋を作ってくれた。肉、白菜、ネギ、ニラ、ニンジン、豆腐代わりの乾燥湯葉……と具沢山のぜいたくな鍋だった。量が多くて食べきれなかった分は翌朝に回した。各々が酒を持ち寄って夜までいろいろな話をした。OBさんたちの現役時代のエピソードや、仕事で中国に行ったときの話等々。特に覚えていたのは他大学の学生と裸踊りをしていったという話だ。また、勉強になったのは、少しテントの外に出るだけなら靴下の上からビニール袋を履くだけで全然寒くないということ。石原さんが現役の時裸足で出ていたらしい。

1/19 行者小屋―地蔵尾根―赤岳天望荘―赤岳山頂―文三郎尾根―行者小屋―美濃戸口

6時起床。まったく寒さを感じず、熟睡できた。ゆつくりと朝食を摂り、お湯を作り、コーヒーを2杯飲み、出発は8時過ぎとなった。天気は快晴で、風も弱い。地蔵尾根はあまり苦勞せずに登れた。ただ、この急な尾根は下りたくはないと思った。石

原さんは前日、酒を飲み過ぎたせい、体調が優れないようだった。森林限界を越えると、西側の展望が開け、北アルプス、乗鞍、御嶽が見えた。尾根に出ると、さすがに風が出てくる。耐風姿勢を教わったが、今回は

出番なし。稜線に出てから1時間で赤岳山頂に立つ。北ア、中ア、南ア、富士山、丹沢、奥秩父と、どの方面も最高の眺めだった。

赤岳からは文三郎尾根ルートで行者小屋まで下る。下り始めが非常に急で、高度感もあるので、かなりビビリしながら下りた。多分、腰が引けていたと思う。岩登りで高所に慣れることと、アイゼントレーニングで確実な技術を身につける必要があると感じた。何回かアイゼンを引っ掛けたのでヒヤリとした。6本爪アイゼンの登山者がいたが、さすがに無謀だと思った。樹林帯まで下りると緊張がゆるみ、散歩気分であつた。行者小屋でテントを撤収して美濃戸口まで戻る。ゆつくり下りたので、駐車場着は17時。前日に続き、ヘッ

ドライブりぎりの時間であつた。茅野駅まで車で送ってもらい、バスで帰阪。夜行バスなのにぐっすり眠れた。森林限界以上で常に緊張状態だったので、精神的にかなり疲労したのだと思う。

今回は冬山入門として、ほぼベストコンディションで登れた。冬山は天候によって危険度が全く異なると聞いているので、様々な状況の経験を積んでいこうと思う。

(基礎工学部修士2回生)

頂上からの眺望満喫

針ノ木岳山行

山田 靖則

【期間】 9/13~15

【メンバー】 山田靖則、石原敏雄

【行動記録】

9/13 正午過ぎ、信濃大町駅で石原氏と合流し、いつもの蕎麦屋で昼食後、またいつものスーパード、その日の夕食と翌朝の朝食、酒等を購入。車で扇沢に向かう。扇沢の市営駐車場に車を入れたが、いっぱいでテントを張れそうな場所が確保できないため、第二駐車場に移動し、車の後ろに何とかスペースが取れたので、ここに決定。スーパードで水を買ったので、石原氏が車で買いに行き、夕食後、目立たぬようにテ

ント設営。

9/14 晴 駐車場(6:15) — 大沢小屋(8:15) — 針ノ木小屋(12:30)

テントをたたみ、不要な装備を車にデポして駐車場を出発し、扇沢駅で登山届提出。初めのうちは関電の管理用道路のヘアピンカーブの先端を縫うような樹林帯の登山道を抜け広場に出る。ここが登山道の起点であつた。赤沢岳からの沢を何カ所か横断する緩い道を1時間も歩くと、いきなり大沢小屋が目に入る。小屋は9/1に営業を終えているので、登山ガイド組合の生みの親とされる百瀬慎太郎氏のレリーフの前で小休止した後、出発。針ノ木谷を渡る木橋あたりから雪溪が出るはずであるが、9月という時期や近年の少雪のためか、雪溪は見当たらない。右岸側の登山道を登り、再び谷を横断する箇所から鎖のある高巻き道を登り詰めると、沢の状況が分かってきた。

雪溪は谷中央で割れ、下の流れが見えるので、雪溪上は明らかに危険である。日本三大雪溪である針ノ木雪溪がここまで小さくなるとは寂しい限りだ。ここを過ぎると沢通しに傾斜がきつくなり、「最終水場」という箇所を過ぎると、棧道のジグザク道である。沢通しながら風の通らぬなか、昼過ぎに針ノ木小屋到着。

当初計画の種池への縦走は体力的にしんどいとの意見で、翌日は針ノ木往復に予定を変更したため、小屋に着くと、ビールに目が行き、蓮華往復のプランもビールの前に消し飛んでしまった。我々の後からも続々と登山者が上がってきて、小屋はほぼ満杯。天気がいいので、夕食まで峠の両側の白馬から穂高までの大パノラマを満喫した。

9/15 晴 針ノ木小屋(6:30) — 針ノ木岳(7:30~8:00) — 針ノ木小屋(8:40~8:55) — 大沢小屋(12:30) — 駐車場(14:30)

小屋の位置からはご来光は見えないが、朝焼けの鹿島槍や槍穂の写真を撮るため朝食が遅くなり、出発も遅くなった。針ノ木往復だけなので、荷物は小屋に預け、手ぶらで針ノ木を往復する。この日も晴天なので、頂上からのパノラマを満喫し、スバリ、赤沢方面の縦走路も確認。剣東面の長次郎や平蔵も残雪が少なく、長次郎雪溪はほぼ熊の岩あたりまでであった。

針ノ木谷の下りは上部こそスロープ状で、まあまあ速さで歩けたが、段差のきつい下りになるとスピードが落ち、後発の女性グループに追い付かれる始末。高巻き道を終了し、大沢小屋までもう少しというところ

で、左膝に力が入らず、体重を支え切れなくなつて転倒。幸い、膝に痛みはなく、転倒の際の傷も微小であつたので、予備のサポーターでズボンの上から膝を固定して、ストックで支えながら足を引きずるようにして何とか扇沢へ。ここでもた自販機のビールが目に入り、大休止。石原氏のアルコールが抜けるまでのんびり駐車場へ。駐車場からは白馬村の対岳館へ車を走らせ、温泉とワインと夕食で山行を締めくくった。

70周年記念行事の報告

2020年新年会

2020年の新年会が2月16日、阪大中之島センター9階、交流サロンで開かれました。新型コロナウィルスの流行前、日曜日の昼間ともあつて穴戸元、木村裕一、坪井和子の久々のメンバーをはじめ、所用で来阪していた和歌山県在住の藤田繁雄氏ら14名が参加されました。

大野会長からは70周年記念行事の報告、75周年記念の海外登山計画や現役山岳部の状況の報告の後、会食に。現役の参加者は大沢駆君（理学部1回生）1人でしたが、1月に石原、畑両氏と八ヶ岳に行った山崎優太君の山行報告を配布し、事務局から簡単な報告をしました。円卓を囲

みながらの歓談はあつという間の2時間でした。

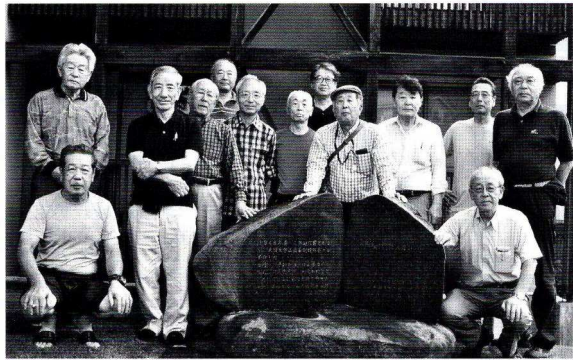
参加者は次のみなさん。

大野会長、木村、穴戸、坪井、大川、高田、豊坂昭弘、畑中薫、山田、黒岩、大宅幸夫、科野、藤田、（現役）大沢

新趣向で盛り上がる

2019年白馬集会

夏季の恒例行事、白馬集会が8月31日（土）、長野県白馬村の対岳館で開催されました。今年は12名の会員が参集（遠くは対馬在住の佐野威和雄氏）し、晩餐会のあと、1976年のアプサラサス遠征のビ



対岳館・記念碑前で

デオ（石原敏雄氏編集）、P29第2次隊の遠征準備の写真（梶本孝治氏提供）の映写、さらに昨年の白馬集会後の神の田圃訪問の写真（大野会長）や春季黒部上廊下横断時の写真（野田憲一郎氏）の紹介もあり、これまでと違った趣向に大いに盛り上がりました。

会食後は「与兵衛倶楽部」に移動して二次会。創立75周年に合わせて計画している海外遠征や現役部員の育成策などについて熱のこもった討論が行われました。

参加者は次のみなさん。

大野会長、兼清喜雄、野田、横尾秀次郎、高田邦雄、豊坂昭弘、出雲路敬孝、山田靖則、田中喜樹、石原、稲垣佳夫、佐野

大阪大学未来基金による

山岳部支援事業を立ち上げ

大阪大学は2009年5月に「大阪大学未来基金」を設置し、大学自らが募金活動を実施している。この活動の一つに課外活動支援プロジェクトがあり、体育会加入クラブの多くが利用している。この支援事業の中に奥山常務理事の取り計らいで「体育会山岳部支援事業」を今年2月に立ち上げた。これは山岳部活動支援の寄付並びに創設75周年記念事

業（海外遠征）に向けた資金集めを趣旨としている。本事業では未来基金が寄付の窓口業務、税金控除、HP広報などを代行してくれる。具体的活動については別途案内しますが、山岳部活動支援および75周年事業の寄付支援にご協力をお願いしたい。

ファイル共有システム

ホームページで公開

昨今、各種報告や案内など数十メガを超える大規模ファイルが多くなり、その提供のため、3月から役員の間でファイル共有システムの使用をテストしていましたが、今般、会員の方々にも使用いただけるようになりました。

本システムは現在、当会が契約しているさくらインターネット社のサーバーを利用するもので、「さくらぽけっと」と名付けられています。山岳会ホームページ左欄の「ファイル共有」での利用となりますが、ユーザードメインおよびパスワードがないと使用できません。ユーザードメインおよびパスワード、ならびに使用方法については別途、郵送でご案内させていただきます。

現在、「さくらぽけっと」内には、海外登山研究会、北アルプス登山史資料、ICIMODの3つのフォル

ダーがあり、各種資料が格納されていますので、ご自由に閲覧ください。また、個人所有のファイルのアップロードも可能です。使用方法の説明書を参照ください。(事務局)

東京支部だより

コロナウイルス騒ぎで

春の懇親会中止

東京支部の春恒例の懇親会は、昨年好評だった新橋の中華レストランで計画し、17名の参加希望者がありました。ところが、新型コロナウイルスの感染が拡大し、残念ながら中止にしました。

今年は大野会長と石原副会長から昨年のOUMC創立70周年行事の報告と75周年に向けた取り組みを説明いただけると期待していただだけに、誠に残念です。支部員がウイルスに負けず健康を維持され、来年の懇親会に元気で参加されることを祈願しています。(井上太一記)

会員の近況

総会や白馬集会の出欠はがきなどから抜粋。その後の変動は未確認。

卒業年次順Ⅱ西暦 敬称略

二本 節夫(工54) 段々と身体機能

能が弱っていくのが自分でわかっているので、少し心配です。しかし、現在の状態を維持すべく色々考えて実行しています。今のところ、まあまあという感じですので、今後も努力を続けたいと思っています。

岩永 剛(医55) 一応、元気に

しています。しかし、登山はできませんし、平地でもとぼと歩いています。おかげさまで週に1日だけ大阪国際がんセンターへ通勤しています。今でも山の写真を見ると、胸が高鳴ります。

樋下 重彦(工58) 84歳になり、

近ごろはもっぱら街歩きを続けています。

岡田 博司(法58) 昨秋から肺気腫、

初期肺炎を指摘され、身体を大事にしております。

兼清 喜雄(工60) 元気で、同じ

ように、日曜日にゴルフ、週日に登山・ハイキングをほとんど毎週、行っています。

前澤 祐一(工62) 昨年9月にペー

スメーカー手術をした関係で、昨年後半は不活発でした。

白井 達郎(工62) 昨年10月、妻

を亡くし、現在、独居老人生活です。何かと不自由をしています。

田村 俊秀(医63) 兵庫医科大学

教授を退職後、遠くはアフガニスタ

ン、近くは奄美群島の喜界島病院などを転々とし、只今、静岡の病院施設長をしています。内科のはずが医師不足で外科、婦人科など、あやしい何でも屋です。80代の半ば近く「元気な時に辞めるのがコツ」とのこと、「店じまい」を考えています。

山本 彰三(法63) 1月後半、タ

イのチェンマイに行き、毎日、ゴルフで過ごした。足元が不自由で歩行が遅いので、早朝スタートし、他人様の迷惑にならないように毎日、一人でラウンド。朝は暑くもなく寒くもなく快適だった。かつて一緒に回った木原秀幸君はもう亡くなったし、米沢成二さんは昨年、娘さんを亡くして気落ちし、一人になってしまった。登山はもう無理だが、芝生の上を歩くのはクッションがあつて大丈夫です。

高田 邦雄(経65) 脚のふらつき

はひどくなる一方。登山用ストックを頼りに歩いています。

吉川 信也(理65) 年金生活になっ

て2年ですが、悠々自適には程遠い毎日です。これも山岳部時代に培われた健康と山行によって磨かれた感受性のおかげです。

石浜 高明(工66) 最近水彩画

に凝っていますが、少しも上手くなりません。

大野 義照(工67) 昨年の私の山

行——。5月、新人の時以来2度目の大峰山・八経ヶ岳(鹿による食害が深刻化)。9月、光岳(易老渡登山口までの林道崩壊進む)。10月、鳳凰三山(台風被害でドンドコ沢コース閉鎖、地蔵岳の最後の砂斜面は道が大雨で消えているので、下りに通過)。2年生の秋以来2度目。ほかに6月に愛媛・赤石山、島根・三瓶山、8月に筑波山。

出雲路 敬孝(工67) 昨年夏、白馬集会に合わせて横尾さん、石原さんと鳥海山に登った以外は丹沢に少し行っただけで、山はさぼっています。会社時代の仲間と旧東海道をきとか、家内とスペイン、ポルトガル旅行など水平歩きが多い最近です。幸い、自分は一応健康に過しています。自分はOUMC同期の辻信男君が亡くなった、会社時代の年齢の近い人が何人か亡くなった、いささか年を感じます。

畑中 薫(医69) 週4日、総合

病院で入院患者の精神科診療を続けています。週1日は太極拳を習っています。また週1日、自分の糖尿病・肺がん手術後、C型肝炎除ウイルス後などで病院通いです。

岡田 謙治(法69) アウトドア遊

びでは、スキー、ヨットとも年20日が目標。インドアではPCでの3DCG作成に大部分の時間を費やして

います。仕事は5年前の3分の1。冬のスキーのために4月から12月がメインです。

(ブログは koka60.jugem.jp)

黒田 治朗 (法69) 昨年はゴルフボールが頭に直撃したり、ホールインワンをしたり、正に当たり年でしたが、暮れにインフルエンザ、正月にぎっくり腰と、体の弱さをつくづく感じています。

甲田 吉彦 (基70) 相変わらず太極拳で忙しくしています。山岳会新年会当日も守口の体育館で催される府大会で、前年の全国大会上位入賞者による模範演武に出ます。

井上 太一 (理73) 新型コロナウイルス緊急事態宣言によって飲み会、ハイキング、旅行などがすべて中止となり、このところ1カ月以上、自宅謹慎が続いています。体力不足解消のために週2回は近くの高尾山に登っています。高尾山口駅から高度差400mを、登り50分、下り45分と年の割にはハイペースで道中の桜や新緑を楽しんでいます。ケーブルカーも運休となり、電車も山道も山頂もシーズンにしては信じられないくらいガラガラです。

松浦 壽彦 (工75) 前回の支部懇親会後、今年は登山をと固く誓い、近況報告しようと思いましたが、ダメでした。ゴルフはカートを、満員

電車では吊革を使わず、足腰を鍛えております。

大宅 幸夫 (歯76) 歯科医院開業のかたわら沢登りやスキーを続けてきましたが、体調が悪かったり、仲間が亡くなったりで、遊ぶのも減り、最近は四国遍路ぐらいになってきました。昨年夏には友人と谷川岳に登りました。

上松 一雄 (工77) 最近海外旅行で歩き回っていますが、仕事もフルでやっています。山は昨年、白山に登り、今年は木曽駒に家内を連れて行こうと思ひ、標高2,600mのホテルを予約したものの、ロープウエーの修理で夏に運行するかどうか不明で、状況を見守っています。私自身は水泳、階段登りでかなり体力もついてきました。

村田 正弘 (工81) 昨年の夏は残念ながらアルプス山行はできませんでした。今年是有峰から雲の平、新穂高温泉を計画しています。

畑 秀信 (人82) コロナウイルス問題で、職場からの指示でプライベートも含め、会合は自粛となりました。対策委員会の事務局なので率先垂範せざるを得ません。

小松 二郎 (工82) 登山からは久しく遠のいております。少しずつ体力をつけたいと思っています。

野口 明 (基83) 今年、還暦を

迎えました。会社を休める時は天気を見て、必ず山に行っております。まだまだ行っていないところが多数あり、山は年齢と共に逃げて行くので一日たりとも無駄に過ごせない状況です。

奥山 宏臣 (医84) 4月より山岳部長を拝命しました。4月の新人勧誘、5月と夏の定着合宿を予定しています。OBの皆さんのご支援をよろしく願ひします。

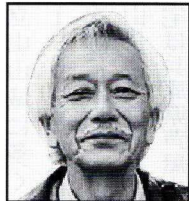
今村 義弘 (工84) 職場の同年代の同僚と年に数回、丹沢や奥秩父の初心者コースでハイキング程度の登山をしています。

光永 正樹 (理95) 松山での単身赴任から千葉の自宅へ戻りました。山登りはハイキング程度です。

追悼

大工原 恭氏 4月5日、悪性リンパ腫のため死去、82歳。1963

年歯学部卒。歯学部助教を経て、1979年鹿児島大学歯学部教授に就任。歯学部部長を務めた後、定年退職し、名誉教授。退職時に鹿児島大学に歯学部口腔



生化学講座奨学寄附金(略称:大工原基金)を残した。ヒマラヤ

P29峰遠征では1次隊から遠征隊事務局を担当し、3次隊では隊員として参加。初登頂した4次隊でも裏方として尽力した。自宅は鹿児島県日置市。

さよなら 大工さん!!

笠松 卓爾

昨年夏の終わりごろ、突然、大工さんからメールが入った。「...6回目の抗がん剤治療が4日から始まったところです。抗がん剤の点滴と副腎皮質ホルモン的大量投与、これでテキをやっつけようという作戦です...」。彼の敵は悪性リンパ腫でした。年齢80を超えて古い友達を失うのはつらいことだ。1957年、ともに阪大山岳部に入部し、中之島の医学部記念館屋上にあつた部屋で初めて出会った。60年余の長い付き合いだった。

阪大山岳会は1970年10月19日、第4次隊で宿願のP29峰初登攀を仕遂げた。第1次隊(1961年)の準備段階から遠征隊事務局の責任者を務めた大工さんは、ネパール政府への登山許可申請書作りに始まり、大蔵省から外貨割り当てを獲得することや、寄付の依頼、受け取り等々、事務全般を取り仕切った。第2、3次隊の準備でも然り。1969年の第3次隊に参加した彼は、時に31歳。後に「私流にヒマラヤ

ヤを楽しんだ」と書いた。そして、P 29の頂上に立ち、その直後に逝った渡部洋とハクパ・ツエリンを偲んで彼は長年、運命の10月19日には杯を上げなかった。

ある年の6月、ボストンのブランダイス大学に留学中の大工さんが、生きた大きなロブスターをぶら下げて私の住むバサデナに現れた。スコッチのグラスを重ねつつ、「こいつあー、ただ茹でて辛子酢醬油に限る」と2人で楽しんだ。翌日から約2週間の日程でロッキーマウンテンに向かう。ロスアンジェルスを出てラスベガスを通った後、ワイオミング州へ。グランド・テイートンで少しばかり岩場を歩き、イエローストーンの地獄めぐりを楽しんだ後、大陸分水嶺に沿って北上し、グレイシャー国立公園に至る。自分の記憶は怪しくても、ロッキーマウンテンで撮った写真が残っている。山と溪谷社『世界の山』の北アメリカの項には、名だたるプロ写真家の作品と並んで大工さんの2点が掲載されている。(Reynolds 2780m ~ Clements 2677m)。

自称・学／岳歴(7学部卒・歯+山)の大工さんは、後に鹿児島大学歯学部教授になり、生化学の教育・研究に専念した。2003年度の定年退職に際しては「歯学部口腔生化学講座奨学寄附金(略称:大工原基金)」

を設けた。大工原教授と共同研究者らによる「ヒト肝臓細胞増殖因子の発見」にも勝る、生物学研究者への大きな贈り物だが、寡黙な彼からこの基金の話聞いたことはない。

2009年秋、大工原夫妻とつるんで2週間の日程でシッキムを旅した。煙を吐く「おもちゃ」蒸気機関車(ダージリン・ヒマラヤ鉄道)に牽かれてのダージリン入り。市内観光の2日後、郊外のタイガー・ヒルで朝日を拝み、雲の切れ間から、はるか東方に座するカンチェンジュンガの勇姿を見た。以前に大工さんが「近頃は手元不如意でね:」と言うのを聞いた覚えがある。先に触れた大工原基金の話を知って初めて、シッキムでのお寺巡りが大工さんの最後の外国旅行になった訳が少しは分かった。チベットの聖地、カイラス峰の麓でまた会いましょうや。(1963年医学部卒)

山本 光二氏 昨年11月16日、老衰のため死去、88歳。1954年法学部卒。大和銀行に入り、人事部長、本店営業部長(常務)などを歴任した。現役時代は小日向一不帰(春)、後立山逆縦走(春)などに参加、後



立山山域に多くの足跡を残した。1961年にはヒマラヤP 29遠征1次隊に参加し、西面の偵察をした。山岳会では理事、評議員を歴任。自宅は兵庫県芦屋市。

温厚だった山本先輩

大戸 元

山本先輩はアタックメンバー、私はサポート。山岳部で現役だったころ、後立山連峰の風雪の中で生死を共にしたことがあったが、いつ、どの山だったか、どうしても思い出せない。また、後年、山本先輩が大和銀行の役員だったころ、同期だった薬学部出身の抱忠男氏が私の自宅近くの川西市にあったドイツの製薬会社の子会社、山本製薬の社長、そして私が同社の産業医をしていて、よく3人で食事をしたことも思い出す。

その後、黒部川下廊下の積雪期横断、鳴沢尾根から見た剣岳など、私が現役時代の雪山の写真の整理をしていたころには、山本先輩のアドバイスを何度も受けた。温厚で適切なアドバイスだったと記憶している。

その頃、先輩の奥様も写真に凝っておられ、奥様の作品が芦屋市の写真展に入選したのをきっかけに家族ぐるみの付き合いも始まった。

私の写真の整理が完成した昨年秋

ごろ、久しぶりに電話したところ、奥様は写真の話どころか、先輩の体の具合がかなり悪いと漏らされた。山岳会の会合では古手のOBから山本先輩のその後の消息を聞かれたが、私はいまいちな返事を繰り返すしかなかった。P 29遠征にも参加された優秀な岳人だった先輩を偲びつつ、後悔と反省を繰り返している。ご冥福をお祈りいたします。

(1957年医学部卒)

鷺沢 忍氏

昨年11月8日死去、87歳。1956年工学部機械工学科卒。現役時代は夏の剣岳合宿以降、不帰南股合宿(夏)、木曾駒ヶ岳山行(5月)などに参加した。自宅は神奈川県横浜市の。

編集後記

今号は創立70周年記念行事の報告と75周年記念事業の計画、さらには山岳部長の交代までが重なり、記事を収容するスペースが心配されましたが、増ページで何とかクリアできました。ただ、掲載する写真が少なくなったため、紙面が少し寂しくなったのではないかと思います。その分、みなさんの「近況」をじっくり読んでいただければ幸いです。

(会報担当・高田邦雄)